

も達の願いのなんと慎ましいこと、それにくらべて、親の子どもへの期待はどうでしょうか？

文庫の子が好きと印をつける本のカードを見てみると、ペーシェンス・ストロングの「子供たち」という詩を思い出します。

“……子供たちは、この悩みのおおい人の世に、自

分から好んで生まれてきたのではありません……中略……。子供たちには、もてなしや金目のおもちゃよりも、愛情が必要です。愛と理解が、幸福な家庭とまじり気のない喜びが。にっこり笑いかける顔、思いやりのある声、平和とハーモニーが、幼い人びとに生きていく喜びと自信をあたえます。……”

(ポケット文庫主宰)

『動物行動学入門』

『生涯発達の心理学 一卷』

『ライフサイクルの心理学 上・下』

水野 悌一

発達、子ども、心理といったキー・ワードに関連し、一九九三年以降に発刊され、入手容易なものに限って見た場合、あまり多くの図書は発見できない。次に掲げた三冊の図書は、内容的にも比較的新しく教養書としても適当ではないかと考え紹介を試みる。

『動物行動学入門』

スレーター、P・J・B著 へ日高敏隆・百瀬浩・

訳 一九九四 同時代ライブラリー 岩波書店

一九〇〇円

P.J.B.Slaterは聖アンドリュース大学自然史教授であり動物行動学者として活躍している。我々がヒトの子どもを観察する場合、しばしば動物行動学的な方法を用いるが、この図書は最近の動物行動学入門書として適切なものと考えられる。スレーターは「一九五〇年以前に動物行動学者が作った理論で同

じ対象を扱っている研究者に今でも役立つと見なされているものはほとんどないといつてよいくらいだ」というが、この文章はフォン・フリッシュの理論は古いとしても、ロレンツやティンバーゲンの思考をとすると信奉してしまう者にとっては衝撃的でさえある。この図書を通して我々は改めて新しいとされる学問的理論の寿命の存在と、生体の研究には中枢神経系の構造・機能の新知識、環境からの影響を考慮することの必要性を教えられるであろう。しかし、「訳者あとがき」のなかで「小冊子ながら、盛り込まれている内容は高度なものでかつ新しい。……もつとも、私たちが著者の考えにすべて賛成というわけではなくて、はっきり反対であることもあったが……」と述べているように、どこに問題点があるのか調べてみるのも興味深い。いずれにしても初心者にいるいろいろな刺激を与えてくれる図書であることに間違いはない。

『生涯発達心理学 一巻 認知・知能・知恵』

バルテス、P・Bら編（東洋・柏木恵子・高橋恵子
・監訳）一九九三 新曜社 三六〇五円

この図書は木陰で一寸読むには内容が高度過ぎるかも知れない。しかし、国際的な視野で「生涯発達」を研究・理解しようとした場合、この程度の研究主題と内容が既に一九八〇年代に要求されていたことを知るうえでも貴重な文献となっている。学術研究のすべての領域で、新しい事実と将来の見通しが要求されることは当然であり、いたずらに枝葉末節の追究にとらわれるべきではないことは明らかである。Baltesらが編集した生涯発達関連の94章から15論文を訳者らが選択して三巻としたものの一巻である。一巻は認知、発達、二巻はパーソナリティの発達、三巻は家族・社会の影響のそれぞれ五論文から構成されている。このうち一巻の構成は、第一章 記憶の生涯にわたる変貌、第二章 成人の思

考、第三章 成人の知能、第四章 知恵の生涯発達、第五章 成長と衰退の心理学となっている。

一巻一章では、加齢とともに記憶能力は下降するが、記憶内容は上昇すると述べていることは容易に納得できる。二章では成人の認知機能の複雑性をすなおに受け入れることの必要性を述べていると思えた。三章では成人の知的能力は加齢によって減退するとはかぎらず時代差が大きいこと、社会からの離脱・家族の離散が知能減退を引きおこしやすいことなどは現代社会の一面を証明するものとして興味深い。五章は、発達を生涯にわたる過程としてとらえ、そのためには学際的研究が必要であることを強調していると理解した。

このように発達心理学の現代の文献で、学際的研究の必要性を述べていることは、我々にもここで再考を促すものと考えたい。いずれにせよ、「生涯発達の心理学」が真面目な研究者にとって啓示的な図書であることは間違いない。

『ライフサイクルの心理学 上・下』

レビンソン、D 著〈南博・訳〉一九九二 講談社学

術文庫 九六〇円・八四〇円

まず、この図書は真面目な読者には好適な緑蔭図書としてお勧めしたい。四十人の成人男性の個人史を通して生涯発達心理学的、精神分析的、社会学などのさまざまな立場から記録・解釈を行ったものである。Levinson, D.J. はエール大学で一九六六年から数年間にわたって学際的に数人の研究者とともに成人の個人史を取り、分析を行った。学問的な

まとめは「生涯発達の心理学」を参照すべきだが、

第一部の「成人の発達について」と第五部「おわりに」では成人の発達の概略がまとめられており、かなり参考になる。そのうちでも、「各発達段階の開始年齢や終了年齢に、比較的個人差がない」と述べているのは興味深い。しかし、これはあくまでアメリカ人男性の場合であり、現代日本人にあてはまるかどうかは今後の研究課題であらう。

いずれにせよ、我が国でも多数のこのような息の長い学際的研究成果が必要とされていることは、間違いない事実である。（お茶の水女子大学）

